

美術館と学校教育との連携に関する一考察 —子どもの考える力、表現する力、自己肯定感を育むための 鑑賞活動の取組—

青木 善治

1 はじめに

鑑賞にかかわって、子どものよさを生かす学習活動を展開する際に留意したいこととして以下の点が上げられる。

すでに何年も前になるが、平成20年3月に告示された学習指導要領に次の視点が加わった。まず、「図画工作科、美術科（中略）生活の中の造形や美術の働き、美術文化に関心をもって、生涯にわたり主体的にかかわっていく態度をはぐくむ」という視点である。また、教科目標に「感性を働かせながら」という文言を加え、表現や鑑賞を貫く〔共通事項〕が新設された。これは、領域や項目などを通して共通に働く資質や能力を示したものであり、子どもをとらえる手立てであると同時に、重要な指導事項でもある。そのため、題材の指導計画や学習指導案の中に位置付け、どこでどのような内容をとらえさせていくかを十分に検討する必要がある。〔共通事項〕は周知のとおり独立して指導するものではない。「感性を働かせている子どもの姿」であり、授業改善の視点である。

私は、教育現場で〔共通事項〕を活用し指導に生かすことが出来た時に、初めて〔共通事項〕が意味あるものになると考える。そのためには教師自身の子どもの学びをとらえる確かな眼差しが不可欠となる。「子どもがどんな作品をつくったのか」といううわべだけのことでなく、プロセスを通して「子どもに何が育ったか」という内面をもしっかりととらえられる教師の眼差しや感性が必要である。このような視点は、鑑賞においても同様である。

その上で、子どもが感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わったり、感じ取る力や思考する力を培ったりするための授業展開の工夫が求められている。また、造形表現活動をする上で欠かせないことは、まず学校や教室に居心地のいい場があり、「自己肯定感」を培いやすい土壤があることなのではないだろうか。そのためには、まず、子どもの行為を共感的に感じ、受け止め、感性を働かせている子どもをしっかりととらえられる教師や大人の存在が不可欠なのである。これは、美術館に勤務する学芸員や職員においても同様である。

私は、2013年4月から新潟県立近代美術館の勤務となり、これまで主に教育普及や学校対応、職場体験の受け入れ、広報活動等に従事してきている。そして、学校との連携について模索しながら実践し、検証し、その手応えのようなものを感じてきている。

2 子ども目線の美術館づくりを目指して

拙稿^(註1)においても述べさせていただいたが、日本とアメリカの美術館（博物館）の歴史を探ってみると次のことがわかる。諸説があるが日本で一番古い美術館・博物館は、1872年（明治5年）に創立した東京国立博物館、アメリカで一番古いのは、東京国立博物館と同じ1872年創立の、ニューヨークのメトロポリタン美術館のようである。つまり、美術館の歴史としては、両国ともできた時期はほぼ同じである。しかし、そこには大きな違いがある。それは、美術館ができた時の経緯である。

（註1）
青木善治『美術館と学校との連携に
関する一考察』新潟県立近代美術館
研究紀要第13号、2014pp.14-15

東京国立博物館は、1872年、すなわち明治5年の湯島聖堂博物館の展覧場からスタートしている。それに対して、アメリカの場合、美術館は美術学校と一緒に創設されている。したがって、もともと、美術館自体がアカデミックな教育機関としての機能も併せもっていたのである。

日本の場合、美術館や博物館に「教育」という認識が出てきたのは戦後のことで、いまだに、教育部門の比重が小さいようである。このことから美術館そのものや教育の場としての美術館が十分に認知されていない現状がみられる。そもそも、美術館の対象は子どもではなく大人であり、マナーよく、静かに黙って鑑賞するところとしてスタートしてきた経緯がある。

アメリカでは、親に連れられて子どもと一緒に美術館に来るのが普通のようなものである。学校の先生が子どもたちを美術館に連れてきて説明したり、絵のスケッチをさせたりしているような姿もよく見かけられるようである。小学校や中学校の授業に美術館を利用しているのである。このような事実も踏まえた上で、子ども目線の美術館づくりを目指し、学校や学芸員との連携をどのように図っていったらよいか。知恵を出し合い、小さなことでも行動に移そうと努力し続けている。

3 鑑賞活動の事例から

(1) 事例1(お話づくりの鑑賞活動)

長岡市立内の小学校4年生^(註2)が来館された事例を紹介する。学級担任の先生は事前打合せの後、活動のねらいを次のように設定された。

- ・ジュニア展の作品を鑑賞し、友だちの作品の素晴らしさに気づく。(図画工作)
- ・絵から感じたことを文章で表し、伝える。(国語)

事前の打合せの際には、展示作品の写真をもとにして、子どもたちに選択させ、あらかじめ教室で作品を決めておきたいとのことだったが、子どもの感動を優先して、当日に本物の作品と出会い、お気に入りの作品を決めることとなった。また、はじめにジュニア展の作品鑑賞をする予定であったが、物語づくりの時間確保も考慮して、まず、コレクション展鑑賞となった。

当館へ着くと、エントランスで私から美術館の働きや鑑賞の際のポイントや今日の活動内容を確認した後、コレクション展示室へ向かった。ちなみに、今回の活動の大まかな流れは次の通りである。

コレクション展鑑賞・物語づくり・相互鑑賞→ジュニア展鑑賞→ 昼食

子どもたちは私と2点の作品の対話型鑑賞を終えると、コレクション展示室1～3室を大まかに鑑賞し、次の写真1、2の様に各自のペースでゆったりと鑑賞し、お気に入りの1点を見つけていた。そして、作品を決めると、じっと作品を見つめ、絵から感じたことをもとに物語を想起し、それを文章に表していった。子どもたちは、お気に入りの作品をみつけると作品の前でじっと作品と向き合い、思い思いにお話作りに没頭する姿を見せていた。

(註2)

長岡市立内の小学4年生23名、引率2名が2014年2月18日10:15～12:20に来館



写真1 作品鑑賞中



写真2 作品鑑賞中

全員が書き終わると、クラスを半分に分け、相互に物語を紹介しあい、お話を聞いた友だちは必ず一言でも物語を聞いた感想を伝えていた。その際、学級のメンバーだけでなく、一般の来館者や保護者も交えて、絵だけではなくそこからうまれた物語も合わせでの鑑賞会となった。次の様なお話が創作された。その一部を紹介する。



写真3 お話の紹介中



写真4 お話の紹介中

・私は、この絵の枯れ葉が落ち静かなようすを見てこんな物語を想像しました。

ある日のことでした。お城は、いつものようににぎやかでとてもうるさい日でした。そこには、おとなしくて静かなお姫さまが住んでいました。「ああ、今日もうるさい日になるのね。こんな毎日いや。」今はお姫様のいとこのさわがしくてあばれんぼうの王子が一ヶ月遊びにきていました。お姫さまは、その王子が大きかったです。

ある日、王子が言いました。「もう一ヶ月とまるから。」お姫さまが言いました。「え〜。」「そう言っずずっとここにいてるんでしょ。」「いないよ。」その王子には、もうすぐ妹のおひめさまが生まれるのです。はじめは、何でも聞いてくれる王子でしたが、妹が生まれるというならさわぐに決まっています。王子は、そのことをみんなに知らせたかったのです。次の日、お城に手紙が届きました。「みなさんお元気ですか。とつぜんですが、女の子の赤ちゃんが生まれました。きかいがあれば見に来てください。」おひめさまがいました。「まあ、赤ちゃんが生まれたのね。みにいかなくちゃ。」みんなは、毎日幸せな生活を送りました。(Sさん)(写真4の作品から)

・私は、この絵の空に続く階段を見てこんな物語を想像しました。

ここは魚も海の幸もよくとれます。お花もいろいろさきます。でもここは、いいところだらけの国ではありません。ここはよく戦争がおきます。戦場となるのです。戦いは、とてもはげしいのです。生き残った人で国の復旧をしているのですが、それでも戦争はまだ起こるのです。もう生きれない人には、空のかいだんが見えるのです。そして、空へ行けるのです。

ある日のことでした。急に空から爆弾が落ちてきたのです。そこにいた人々には見えただけです。空への階段が。急いで階段を上がると、そこは、まさに天国でした。空には、好きな物がなんでもそろっていました。最初は不安だったけれど、2、3日いるとすぐ慣れました。それは、続くものではありません。下に戻りたい人ができました。念のための階段下行きがあるのです。戦争が終わったころ下をのぞくと、とても、きれいになっていたのです。少しの人が下に降りて、少し歩きまわりました。少し行くだけでも、とても復旧してあったのです。降りた人たちは、上の人たちに伝えました。

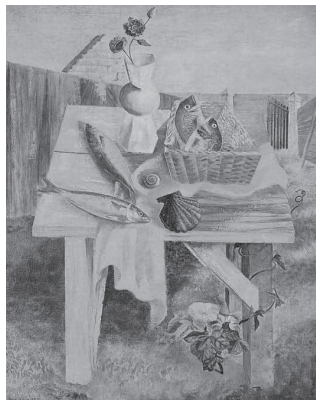


写真5 吉原治良《静物》1929年 当館蔵

「とてもきれいになっている。とても復旧されてる。」

と伝えました。みんなは下に降りてみました。そうしたら、下に戻りたくなくなりました。上に残る人もいました。上での生活をやめることを決めた人たちは、空の上ではなく、地上での生活をしました。戻った人たちは一夜中お祭りをしました。まだ空への階段はどこかにあるのでしょうか。(Oさん)(写真5の作品から)

物語の発表後、「質問や感想をお願いします。」と発表者から言われ、次の様な感想などが返されていた。

<感想>

- ・空への階段があつてすごいですね。
- ・戦争が起きて、さらに逃げ込んで、そして戦争が終わったから、綺麗だったから不思議に思っ、(理想)のところとか分かりました。

活動の概要のみになってしまったが、この様に、互いに作品を媒介にして、作品からイメージをひろげてつくられたお話を聞き合っ、相手のよかったところを伝えあう活動が子どもの自己肯定感も育むことにつながったようである。よかった点を伝えられ、とてもうれしそうな表情を多く見る事ができた。そして、この鑑賞会は、絵から感じたことを文章で表し伝えるという、図画工作のみならず、国語科の学習活動とも関連させた実践である。相対的に図画工作の時間が減少する中、このように他教科と連動させた実践は、美術館を活用する上で非常に有効であると考え。そこで、このような活動ができることも図画工作・美術の長岡市教育研究会総会などで紹介させていただき、その成果なども今後も広く周知していきたいと考える。続いて、夏休みを含む期間のコレクション展示室において、子ども向けの展覧会「不思議の国へようこそ」を開催した際の事例を紹介する。

美術館と学校との連携をより一層進めるには、まず、美術館のよさを大人自身にもつと伝えていく必要があると考える。そこで、様々なイベントやワークショップも実施しているが、特に今年度は、コレクション展において、大人から子どもまで楽しめる参加型

展示を教育普及部において工夫してきている。特に、子どもが楽しめる企画を実施し、次世代の美術ファンを育てるため、今年度から、夏休みを含む期間のコレクション展示室において、子ども向けの展覧会を開催している。

企画展ではなく、当館が所有する作品を活用する「コレクション展」の事例である。具体的に来館された子どもたちのどのような姿がみられたのか、子どもの姿で紹介していくことにする。

(2) 事例2(子どもが親しめるコレクション展の鑑賞活動)

鑑賞者が作品の中に入りこんだような感覚を持てる大画面作品を中心に展示したり、また作品を気軽に楽しめるよう、いくつかの見方を提案したり、特定の場所から見たり、紙筒で部分をのぞいたり、目、心、身体全体で作品を楽しむ工夫等を教育普及部で事前に検討しあい準備した。具体的には、圧倒的な素材感、鑑賞をアシストすることば、いつもと違う視点で楽しめる小道具、幅が15m近くもある巨大作品等みる人の視野に入りきれないほどの大画面作品が展示された。しかも、それぞれの絵肌は、単なる絵具による描写ではなく、ステンレスや板、デコボコと盛り上がった画面など、強烈な素材感をもったもの。色や形だけでは語りきれない、“実物の”美術の魅力を体感しやすく工夫された。さらに今回初めて展示している全作品に、それぞれ「作品を楽しくみるためのことばの箱」を設け、その中には鑑賞を楽しむためのヒントやアシストする言葉を記した何枚かのカードを入れた。そしてあれこれと話し合いながら、ゲーム感覚で鑑賞を楽しむことが可能な環境を準備した。動作を真似するための「スローモーションレーン」、座ってみるための「たたみ」、そして作品の部分をのぞくための「手づくり望遠鏡」など、楽しい小道具も用意した。いつもとちがう状況でみると、新しい発見やワクワク感も倍増する。また、展示室の外には、パズルコーナーも設け、作品を楽しんだ後には、「ジグソーパズルに挑戦!」難易度もいろいろ用意し、子どもから大人まで楽しめる場を提供した。また、これらの展覧会情報は、チラシや新潟県や当館ホームページに掲載したり、長岡市内の近郊の主な学校へ



写真6 スローモーションレーン「走る童子」

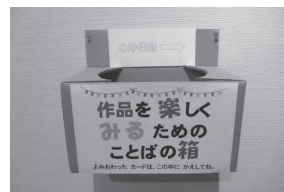


写真7 作品を楽しくみるためのことばの箱

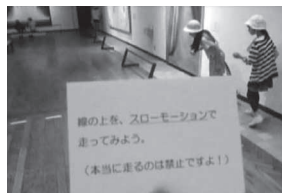


写真8 作品を楽しくみるためのことば(カード)



写真9 座ってみるたたみコーナー



写真10 作品の部分をのぞくための「手づくり望遠鏡」



写真11 ジグソーパズルに挑戦コーナー

は直接訪問し展示会の魅力を伝えたり、中越地区内の全ての小・中学校へは一斉メール配信し、情報提供に努めた。

その結果、学期末にもかかわらず多くの団体来館があり、実際に次のような5年生^(註3)の子どもの姿がみられた。2名の子どもの様子を中心に記していく。

(註3)
小千谷市内の小学5年生34名、引率
2名が2015年7月7日9:00～10:30
に来館

・作品を鑑賞する子どもの姿から

まず、展示室に入ると奈良の「せんとくん」を制作した籾内佐斗司氏の《走る童子》が子どもたちを出迎える。その結果、美術館は静かに行儀よくみるところ、そんな概念を払拭することにつながったようである。子どもたちは、作品の手足の動きをよく見ながら、楽しみながらスローモーションで動作化する姿をみせていた。



写真12 スローモーションレーンの様子

そして、次の展示作品を見る際、次のような相互行為や発話がみられた。Aさんを中心にみていくことにする。

<図版1>		2015年7月7日 9時17分～9時19分
	相互行為・発話	備考
01:a	次の作品に近づくときカードが入っている箱のところへ行き、一枚のカードを取り出す	
02:a	「この絵の奥の方で、誰かが待っているとしたら誰がいると思う」と手に取ったカードに書かれている言葉を読み上げ、読み終えるとともに戻し、作品から離れてみる	
03:a	「ピーマン人参 あれなんだろう ごぼうかな」と首を傾けながら言う	
04:b	「あれスプーンだと思う 真ん中のやつ」と指さしながら言う	
05:a	「え、でもピーマンに見える」と自分の見え方を言う	
06:a	「ピーマンが下に見える」と両腕で画面の様子を表しながら言う	
07:b	じっと見つめる	
08:a	「ピーマンがこうあるじゃん、その上にこう」と説明する	
09:b	「ああ」と小さな声でつぶやく	
10:a	「で、人参があっちで」といって画面を指さす	
11:a	「ふーん」と思をもらし、作品に近寄る	
12:a	「これ、()」と下の方を指さしながら言う	
13:a	「もう一つ」といいながら、カードが入っている箱に向かう	

まず、Aさん(以下a)がカードが入っている箱のところへ行き、一枚のカードを手にとった。そのカードを見ながら02:a「この絵の奥の方で、誰かが待っているとしたら誰がいると思う」とカードに書かれている言葉を読み上げると、作品全体が見えるように、作品から5メートルほど離れて見た。すかさずaは03:a「ピーマン人参 あれなんだろう ごぼうかな」と首を傾けながら声をあげた。すると、隣にいたbは、aのつぶやきに返すように、04:b「あれスプーンだと思う 真ん中のやつ」と指さしながら自分の感じたことを答えていた。しかし、aは、どうしてもスプーンには見えなかったのか、05:a「え、でもピーマン

に見える」と自分の感じている見え方を声にした。そして、両腕で画面の様子を表しながら 06:a「ピーマンが下に見える」と話した。そのように言われて、さっきはスプーンと言っていた b は、作品の画面を 07:b「じっと見つめていた」。

そんな b の姿をみると、a は、08:a「ピーマンがこうあるじゃん、その上にこう」と身振りもしながら説明を加えた。すると、b は、ピーマンに見えてきたのか、09:b「ああ」と小さな声でつぶやき、a の見え方に同調する姿をみせていた。さらに、10:a「で、人参があっちで」と、ピーマン以外に人参が描かれていることを指さしながら話していた。

ここまでの様子からカードの問いは「この絵の奥の方で、誰かが待っているとしたら誰がいると思う」というものであったが、二人の様子から、そもそも画面に一体何が描かれているのかを考えることに夢中になったようである。

<図版 2>

9時19分～9時21分

	相互行為・発話	備考
01:a	「ここにかいてあるものは、本当はどのくらいの大きさだと思う?」と一枚のカードをひるいあげて声に出して読み上げ直す	
02:a	「こんぐらい」と両手でその大きさを表し、その後作品を見て確認する	
03:b	b も同じように手を合わせて、作品の方をみる	
4:a	手に取ったカードに書かれている言葉を読み上げ、読み終えるとともに戻し、作品から離れてみる	
05:a	「これをおっきくしてひとつの(かけ)になる」両手を広げていう	
06:c	「これなに?」と a に向かって言う	
07:a	「真ん中のやつがピーマンで、こっちが人参でこれがゴボウかなピーマン人参 あれなんだろう 何だろうごぼうかな」と	
08:c	「ごぼうか、なるほどねー」と言う	
09:c	「ここもよくみてごらん」と指さしながら言う	
10:a	「ふーん」と声をもらす	
11:c	「ピーマン両方ピーマン?」と聞く	
12:a	「両方ピーマン」と答える	
13:a	「で、上が人参」という	
14:a	「人参」と上を指さしながら言う	
15:c	「人参かー」	
16:a	「なんか線もかいてあるし」と言う	
17:c	「線がねーあの人参の、こういう線だよ」とうなづきながら言う	
18:a	「茶色が何かよくわからない」	
19:b	「茶色ゴボウかな」とすかさず言う	
20:a	「うーん、もう一枚」と言いながら箱に向かう	
21:b	「もういっぺん」	

恐らく、カードを引き、画面全体を見渡したときに、一体何が描かれているのか、とても気になったからであろう。実際のところ、大人がみても何が描かれているのか、定かではない作品ではある。見る者の想像力を駆り立てる作品との出会いが二人の想像力を促し、お互いの見方や感じ方を共有しあえる姿をみることができた。

そして、13:a「もう一つ」といいながら、カードが入っている箱に向かい一枚のカードを取り上げた。その時の相互行為や発話は以下の通りである。

a は 2 枚目のカードを手にとると 01:a「ここにかいてあるものは、本当はどのくらいの大きさだと思う?」と読み上げた。すかさず、02:a「こんぐらい」と両手でその大きさを表し、その後作品を見て確かめていた。すると、隣の b も 03:b 同じように手を合わせて、作品の方をみていた。a は、手に取ったカードを読み終えると、もとの位置に戻し、作品から離れてみた。そして a は、05:a「これをおっきくしてひとつの(かけ)になる」と両手を

広げていった。そこに、近づいてきた C 学芸員が 06:c「これなに?」と a に向かって尋ねた。a は、07:a「真ん中のやつがピーマンで、こっちが人参でこれがゴボウかなピーマン、人参、あれ何だろう、何だろうごぼうかな」と答えた。側にいた C 学芸員は「ごぼうか、なるほどねー」と言葉を返すと、「ここもよくみてごらん」と指さしながら言った。a は、「ふーん」と小さな声をもらすと、C 学芸員が 11:c「ピーマン両方ピーマン?」と確認するように聞いた。a は、12:a「両方ピーマン」と答え、すかさず 13:a「で、上が人参」、「人参」と上を指さしながら付け足した。その返答を受けて、C 学芸員は「人参かー」と声をもらすと、a は 16:a「なんか線もかいてあるし」とその根拠を伝えた。それを受けて、C 学芸員は 17:c「線がねーあの人参の、こういう線だよ」とうなづきながら言った。a は、C 学芸員に対して自分の考えを分かってくれる人だと安心もしたのか、18:a「茶色が何かよくわからない」と疑問に感じていることをつぶやいた。すかさずその隣でずっと一緒にみてきた b が 19:b「茶色ゴボウかな」と自分の考えを伝えていた。一区切りがついたのか、a は、20:a「うーん、もう一枚」と言いながら箱に向かうと、その隣で一緒にいた b も 21:b「もういっぺん」と言い、次のカードを楽しみにしている様子であった。

僅かな時間であるが、この二人の様子から様々なことが考察された。箱の中からカードを引くというゲーム的な要因も加わって、子どもたちはカードに記されている内容や作品を媒介にして、お互いの考えを出し合い、自ら考え、主体的に取り組んでいる姿が見られた。しかもお互いに自分の思いを出し合い、他者を認め合っているのである。そして、お互いの考えを尊重しようと、努めていることがうかがえた。すなわち、この鑑賞活動や展示作品が一人一人の子どもをつなげるきっかけともなり、お互いの信頼関係をも培っていると言えよう。まさに「鑑賞活動」の場は、自分の気持ちを開く状況が生まれやすい場なのではないだろうか。

この二人は仲がいいから一緒にいるのではなく、仲のいい関係そのものもつくられているようである。一見どこにでもあるような些細な言動に見えるかもしれないが、お互いの信頼感や一緒に共感・体感しあっていることの喜びや楽しさを表情にもみることができた。鑑賞活動では、子どもたちの様子からも、柔らかな声と身体による「交わり」や「学び」が生まれやすいことが確認された。まさに、子どもの考え想像する力、自分の思いを表現する力、他者から認められ、自己肯定感をも育みやすいことを子ども様子から確認することができた。この後、a たちは隣の第 3 展示室「近代美術館の名品」にも入って鑑賞していくのだが、次の写真が示すように、とても興味深い姿をみることができた。

それは、写真13～16が示すように、鑑賞のヒントなどのカードのない第3展示室でも、a たちは作品から受けた感じや見つ

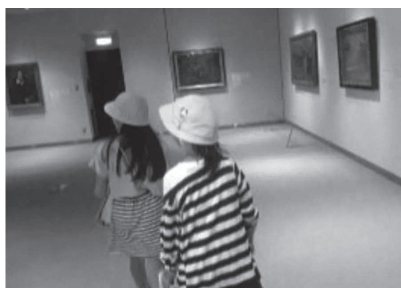


写真13 隣の第3展示室へ



写真14 感じたことを語りだす



写真15 立体作品も同様に



写真16 同じポーズをしてみる



写真17 他の子と一緒に



写真18 他の男子児童と一緒に

けたことや不思議に思うことなどを、お互いにどんどん声にし主体的にかかわっていく姿をみせていたのである。立体作品をみた際には、写真16の様に思わず作品と同じポーズをしてみる姿もみせていた。また、いつも二人だけで活動しているわけではなく、他の異性のグループとも一緒に作品について語り合う姿もみせていた。今回アンケートには一般の方を含め、次のように書かれていた。

その一部を紹介する。

- ・たきのところすわったらちょっとだけながさるかんじがしました。にんげんみたいな人ぎょうがおもしろかったです。(小学校2年生)
- ・絵にはいろんなヒミツがあつておもしろかったです。(小学校3年生)
- ・友だちといっしょになぞときをしたのが楽しかったです。とくに「たき」の絵を友だちとたたみの上にのりながら見たのが、おもしろかったです。(小学校5年生)
- ・自分で想像するのがとてもおもしろかったです。それに、その答えを探して、見つけるのがとてもうれしくなるので、よいと思いました。(小学校6年生)
- ・自由な発想で子どものような気持ちになりました。斬新でおもしろかったです。(20代)
- ・見方を変えるだけで、1つの作品に対する想いについて考えたら、とまらなくなりました。このような展覧会をこれからもお願いします。(20代)
- ・美術に触れるよい機会になりました。たたみや望遠鏡等、子どもたちが楽しめる工夫があつてとてもよかったです。美術との距離が縮まる工夫ですね。ありがとうございました。(50代)

4 終わりに

本間美里と松本健義は、「作品の見え方が他者との言葉のやりとりの中でつくられ、それがまた別の人との間に起こり、その一連のやりとりを通して、『作品』を知覚している。語りや見方、考え方、ふるまいなどの、作品とみる人との相互作用により、語りと共に起る知覚であり、経験でもある。」^(註4)と述べているが、まさに、鑑賞活動は作品を媒介にしながら、互いの経験・語り・知覚を繋いで、互いの中に協働の世界をつくりだしていくことにつながると考えられる。鑑賞中の子どもの会話や行為をとらえ直していくと、そのかわり合いの瞬間瞬間で、わたしの疑問や問題・課題・考え・試み・判断・答え・納得・知識・解決などをつくりだす姿をみることができる。このような会話や行為は友だちとかわり合いながら展開され、やがては社会や文化をつくりだしていくものとなるのではないだろうか。

このように鑑賞活動の場はとても重要な学び合いの場であると考えます。美術館において気軽に語り合える環境の重要性を再確認することができた。これまでは美術館ではマナーよく、じっと静かにみるところというイメージが先行されがちであった。ところが、実際の子どもの姿からそれ以上に大切なことが見えてきた。それは、子どもたち一人一人にとって、これまで獲得してきた知識や技能と新たな出来事をつなげたり、お互いの関係をつなげたりしていくためには、自分の考えを気軽に語り合えるような対話型鑑賞やギャラリートーク等といった状況をつくりだしていくことが大切だと考える。そして、その場その場でどのように子どもに共感したり対話したりしながら支援していくのが、とても重要であることを認識することができた。課題はたくさんあるが、これまでの教員としての経験を活かし、美術館の鑑賞活動においても、どのように学び合う姿が見られるのかありのままに追求し、その魅力や可能性を伝えていきたい。そして美術館と学校が具体的にどのように連携し、自己肯定感をも育むことのできる鑑賞活動を学年や子どもの実態に応じて提供することができるのか、現場の教師の声を積極的に取り入れながら実践し、具体的な子どもの姿を通して追求し続けていきたい。

(新潟県立近代美術館 学芸課課長代理)

(註4)

本間美里・松本健義「対話による鑑賞活動における経験・語り・知覚の生成過程について」『美術教育学、美術科教育学会誌』第36号、2015. pp.404-405